



コロナ禍での就労準備支援事業の 取り組みについて

香川県 救護施設 萬象園
指導員 北原 大作

施設紹介



- ・昭和44年に緊急救護施設として開設。
- ・平成12年に全面改築を行い「小舎制」を導入。
- ・個別支援計画を支援の柱として支援を提供。

- ・居宅生活訓練事業、通所事業等を実施。
- ・平成27年より生活困窮者自立支援法による就労準備支援事業を実施。
- ・平成28年より生活困窮者就労訓練事業を実施。



新型コロナウイルス感染対策

施設内: 消毒、換気の徹底、外出制限、マスク着用とこまめな交換、食事の対応方法の変更、行事の実施方法や新たな取り組み等の検討

施設外: 地域交流や地域貢献活動(地元開催のお祭りへの出店、近隣小学校との校外学習、近隣河川敷の清掃活動、等)は自粛。

就労準備支援事業:「フルーツファーム作業」で支援継続。

就労準備支援事業

きっかけ: 長年地元の小学校と校外学習で交流を継続。
「食事が十分与えられていない子供達が増えている」



「フルーツファーム」で育てた野菜を、学童保育の子供達や家庭に届ける活動開始。

平成25年11月、香川県丸亀市が生活困窮者自立促進モデル事業を開始。

平成26年4月、「就労準備支援モデル事業」開始。

作業内容

【萬象園作業内容】

- ①屋内作業②花卉作業③委託作業
- ④フルーツファーム作業

【就労準備支援事業】

当初→屋内作業参加

現在→フルーツファーム作業参加



コロナ禍でも支援継続できた理由

◎屋外作業（密閉・密集・密接を回避できる）

◎赤い羽根福祉基金の助成によるシェアホーム「寿康」

『シェアホーム寿康』



『赤い羽根福祉基金』



赤い羽根福祉基金助成

令和元年 シェアホーム「寿康(じゅこう)」開設 (建売住宅購入)

目的: グループホームとしての機能、また障害の有無にとらわれず必要な方に生活の場として活用してもらう

【コロナ禍での活用方法】

- ・外勤利用者の生活場(施設内感染予防)
- ・就労準備支援事業(ミーティング、夏冬の作業場、入浴・洗濯の清潔管理支援提供)



フルーツファームの特性

①屋外作業(広い敷地で開放感)

②10名弱の少人数

「コミュニケーションが苦手」



本当はもっと話したい！

【ポイント】

①信頼関係

②「頑張って作業を続けよう」と思える意欲



利用者の特性と支援方法

- 真面目、丁寧、優しい、弱さの理解が高い、協調性がある
- 自信がない、周りのせいにして自分を責める、独特な思考



また家にこもる生活に戻ろうとする



- ◎笑う、趣味と利用者に関心、本人の力を評価、担当者の情報と支援方針の共有

利用者：自信の獲得
支援者：励まされる



相乗効果！

フルーツファームの可能性

- ① サツマイモ掘り体験実施(萬象園利用者)
- ② 大根掘り体験実施(小学校校外学習)
- ③ 地域に野菜を販売し地域貢献
- ④ 就労支援の幅広い対応と活動発信

「サツマイモ掘り体験」



「産直市場出荷」



「丸亀市社会福祉協議会広報紙掲載」

「大根掘り体験」



最後に

●作業が無ければ、家から出ることもなく、誰との接点もないまま、孤独の苦しさや寂しさを抱え続けていたのではないか。



- ★利用者にとって、作業時間、作業に通うことは、生活の中で大切な時間と場所となっている。
- ★地域で困っている人に、手を差し伸べ協力できる事業の発展が必要。施設利用者支援だけでなく、生活困窮者支援も救護施設の役割として果たしていく。
- ★皆で支え合いながら共生していける社会作りの促進と、コロナ禍でも取り組めることを、これからも考えていく。



ご清聴ありがとうございました。

